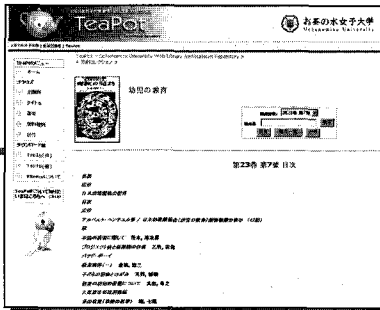


▶『幼児の教育』ネット公開に寄せて (12)

倉橋惣三と女高師附属幼稚園保母たちの 実践研究の歩み

立浪澄子



お茶の水女子大学附属図書館のWEBサイト
内の「お茶の水女子大学教育・研究成果レ
クレーション (略称 TeaPot)」にてバックナン
バーインターネット公開中。

URL : <http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/>

保育の方法に関する研究は、まず保育者の観察によ
る疑問や、何となく体感する違和感から発するように
思います。その疑問や違和感をそのままにせず「何だ
ろう」とこたわり、それを言葉にしてほかの人と共有
したり討論したりすることで、思わぬ発見をすること
があります。その結果、全く別の事柄と結びついた
り、自分の中で突然目の前が開ける思いがしたりする
ことも少なくありません。

ですから、実践研究では共同研究こそ最も大切なも
のであると考えられますが、その先達として著名なの
は、倉橋惣三と女高師（東京女子高等師範学校）附属
幼稚園（現お茶の水女子大学附属幼稚園。以下、附属
幼稚園と略）の保母（戦前、幼稚園教諭は幼稚園保母
と呼ばれていました）たちの作業です。

▼倉橋惣三と女高師附属幼稚園の共同研究

倉橋惣三は一九一七（大正六）年から一九四九（昭

和二十四)年までに三度、合わせれば二十年以上にわたって、附属幼稚園の主事(園長)を務めました。

このことは、倉橋の理論形成の過程で、とても大きな意味をもっているのではないでしょうか。なぜなら、倉橋の理論は、外国の文献の翻訳や当時流行した哲学的思弁からというよりも、常に幼児の元気な声や足音が響き渡る環境の中で、つい先程幼児を送り出した人々との語らいを重ねる中から生まれてきたといえるからです。それは彼自身の言によっても知ることができます。

「幼稚園に関する私の研究は、すべて東京女子師範学校の附属幼稚園において、考えつつ行いつつ、行いつつ考えつつ進められて来た。従って、いつでも同僚保母諸君の助けを借りている。助けを借りたというよりも、共同研究で歩いて来たといった方がほんとうである」[※]

『幼児の教育』の中からその記録を読み進めていくと、

初めのころは、附属幼稚園の保母たちも決して倉橋の論のとおり保育を進めていたわけではないことがわかります。しかし、保母たちは、自身が日々の保育の中で気づいたり、試みたりしたことを倉橋とのやりとりの中で咀嚼し、反芻し、その経験を通して倉橋の論を自らも体感していったのではないのでしょうか。その結果として保母自らが新しい活動スタイルを芽生えさせていったのだと私は考えています。

そして倉橋もまた、保母の話聞きながら、自分の考えを咀嚼し、反芻し、再確認し、方向性を明確にしていったのではないかと考えています。

広い視野と学問的素養をもった研究者と、実際に子どもと出会う保母がそれぞれの立場を生かしながら、互いの経験や知識を自在に絡み合わせつつ、一つの独自の実践方法を編み出していった、それが昭和初期の附属幼稚園の姿であり、その姿は折々の『幼児の教育』にしっかりと残されています。

▼「座談会」を重ねる中で

倉橋と保母たちとの共同研究の生成の姿を、以下に見ていきましょう。

一九二九（昭和四）年の第二九巻第七号に「保育座談会」という記事が初めてでます。出席者は倉橋、堀七蔵（一時期、附属幼稚園主事）、そして及川、新庄、神原、徳久、白根、澤、当時の附属幼稚園の保母たちです。

この時の題材は、ずばり「幼児の仕事の際における保母の態度並びに、もし保母の力を加うべき場合如何程度の程度に力を添えていいでしょうか（31頁）」です。ずいぶん長い題名ではありますが、現場保育者ならば、誰にとつても切実な問題でしょう。このような題材の設定の仕方には、現場の問題、保母自身の問題を、まさに「研究課題」として取り上げていこうとする倉橋の面目躍如たるものがあります。

座談会はこの後もさまざまな題材を取り上げ続いていきます^{注2}。しかしその記録を読む限り、初めのころは、主役は倉橋と堀であり、終始二人のやりとりがメインになっていきます。保母たちは常に問題設定か話題提供の役割しか果たしていません。時折発する意見もほとんどは「何々の場合はどうしたらよろしいでしょう」というような疑問形が目立ちます。堀の「いつたい、遊戯の教育価値は何なの」という質問に、新庄保母はまだ「分からないんですよ。こつちが伺いたい所ですわ」と答えています^{注3}。

ようやく後半「問題の子供について」あたりから、保母たちの舌がなめらかになり、発言者も特定の人だけではなくなってきました。会を重ねるうちに、自分たちにとつて最も身近な問題を、倉橋が具体的に、かつさまざまな視点からとらえ、方向を示してくれることで信頼関係を深めていった様子が感じられます。ただ、これには倉橋が一九三〇（昭和五）年十二月、

再び附属幼稚園の主事になったことも大きく影響していると思います。

▼保育日誌を『幼児の教育』誌上に紹介する

次に私が注目し、今回この稿でぜひとも紹介したいのが「五月の一週間」という保育日誌です。「東京女子師範学校附属幼稚園に於ける保育の実際」と副題がついています。一九三二（昭和七）年、『幼児の教育』第三十二巻第六号に掲載されました。時期的に見て、おそらく同年五月二十三日（月）から二十八日（土）までの六日間の全六クラス（四、五歳児）の保育日誌がすぐさま掲載されたものと思われます。

当時の附属幼稚園の担任保育母によって書かれたもので、文体や構成もそれぞれでありながら、いずれの記録もその日のクラスの保育の風景を彷彿とさせるものです。

倉橋はなぜ保育日誌を『幼児の教育』誌上に掲載し

たのでしょうか。その「はしがき」で、彼は次のように述べています。

「幼稚園は生きている。その生きているところを、ありのままに、なまなましく記しとめたのが、之等の日誌である。（中略）その中に、私たちが平生活しあっている考え方や、心もちが、全局的に、又部分的に、おのづから実現せられているものに相違ない（2頁）」

保育案（現代風にいえば教育課程）は昔も今も、紙に書かれた「事前」の「計画」としてイメージされやすいのですが、倉橋は、事前の計画を保育母の計算や準備に具体化し、「幼児の生活を、生活としての自由と必然とに生かしてゆく（同3頁）」実践を何よりも重視していました。従って、彼にとって保育日誌とは、事後の記録として、まさに「生きた保育」をとらえるためになくはならないものだったのでしょう。だか

らこそ、彼は保育案以前に保育日誌を公表したのではないでしようか。

▼四歳児、五月の一週間

では、実際の日誌を見てみましょう。ここでは、年少児（四歳児）神原キク保育の「川の組」を取り上げてみます。

五月二十五日（水）、お漏らしをする子が出ます。これで三度目。「注意をしたら、今日は、しよげていた。分つて来たんじゃないかしら」（同31頁）と思う神原保育は子どもの表情をよく見ています。

これは神原保育だけではありません。海の組（五歳児クラス）担任の菊池フジノ保育は、五月二十四日（火）の日誌の中で、こう述べています。

「子供達の眼は一樣にそちらを向いた。そして『僕達も何か』といった様の表情がかすかに動いた（同

6頁）」

この「かすかな動き」を瞬時に見てとつたのはさすがだと思えます。菊池保育はそこから元々この日予定していた自由画の指導に進んでいくのです。

言葉での表現が未熟な幼児の思いをとらえるには、その表情や「お漏らし」など行動による表現を見逃さないことが保育者には求められます。附属幼稚園の保育たちはこのような細やかな観察から、子どもが求めているものを自ら感じ取って保育案に具体化していったのではないでしようか。

また、神原保育は、初め汽車ごっこを中心はこの週の遊びを心積もりしていたようですが、四歳の一学期ではなかなかそこまでいきませんでした。ある程度予想はしていたものの、日誌を通して改めてそのことが確認されたのです。

このような経験がおそらくは生かされたのでしよう、「系統的保育案の実際」^{注4}（一九三五）には、四歳児の初めごろは誘導保育案の計画がありません。このよう

な点からも、倉橋の理論には附属幼稚園保母の経験が色濃く反映されていることがわかります。

どんなに周到な計画を立てても、保育は「生きてい
る」ものですから、思わぬ展開がいつでも起こり得ま
す。だからこそ、どのように予想が食い違ったのか、
なぜそのような事態が起こったのか、その時の対応は
あれでよかったのか、もし問題があったとしたらどう
すればよかったのか、いろいろな思いが保育終了後に
沸きあがってきます。それを書き留め、次の実践に生
かしていく、そうやってこそ初めて、今日の実践が明
日の実践へつながり、カリキュラム編成の足がかりと
なります。

倉橋と附属幼稚園の保母たちは、このような「実践
からカリキュラムへ」というカリキュラム編成の道筋
を共同でつくりだしていったのです。『幼児の教育』
誌の中に残されたその足跡は、日本の保育界の財産だ
と思います。

(長野県短期大学)

注

1 倉橋惣三文庫1「幼稚園真諦」フレイベル館二〇〇八年

5頁(原題は「幼稚園保育法真諦」一九三四年出版)

2 「ぬり絵 きり紙」(第二九卷第十号)

「粘土」(第二九卷第十一号)

「木工・きびがら細工・豆細工・摺紙・織紙」

(第二九卷第十二号)

「談話について」(第三十卷第一号)

「ストーブを囲んで―遊戯についての話―」

(第三十卷第二号)

「遊戯唱歌について」(第三十卷第五号)

「観察について」(第三十卷第十号)

「問題の子供について」(第三十卷第十一号)

「低学年幼稚園座談会」(第三十一卷第五号)

「仲間にはいない子、仲間にはいない子」

(第三十一卷第十二号)

「い、子を語る」(第三十二卷第一号)

3 「ストーブを囲んで―遊戯についてのはなし―」

(第三十卷第二号 32頁)

4 東京女子高等師範学校附属幼稚園編

日本幼稚園協会発行 一九三五年